



Title	北ツングース諸語とコリマ・ユカギール語における文法的類似性について
Author(s)	白, 尚燁
Citation	北方言語研究, 10, 171-185
Issue Date	2020-03-20
DOI	https://doi.org/10.14943/93115
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/77599
Type	departmental bulletin paper
File Information	10_171_185.pdf



北ツングース諸語とコリマ・ユカギール語における文法的類似性について¹

白 尚 燁
(室蘭工業大学)

キーワード：北ツングース諸語、コリマ・ユカギール語、地域的分布、類型論的特徴、言語接触

0. はじめに

ツングース諸語は、東シベリア、沿海州、サハリン島、中国東北地方、新疆・ウイグル自治区にかけて分布する 11-12 からの言語で構成される同系の言語を指す (図 1, 2 参照)。ロシア領と中国領の広い地域にまたがって話されるツングース諸語は、チュルク諸語、ユカギール語、ロシア語、モンゴル諸語、中国語、ニヴフ語、アイヌ語等、系統の異なる多くの言語と隣接していることから、周辺言語との言語接触の可能性が提起されてきた。

図 1. ツングース諸語の系統的分類² (Ikegami 1974)

- | |
|---|
| 第 I 群：エウエンキー語(Ek)、エウエン語(E)、ネギダル語(N)、ソロン語(S) |
| 第 II 群：ウデヘ語(U)、オロチ語(Oc)、ホジェン語(Hz) |
| 第 III 群：ナーナイ語(Nn)、ウルチャ語(Ol)、ウイльта語(Ut) |
| 第 IV 群：満洲語(M) |

図 2. ツングース諸語と周辺言語の地域的分布 (Tsumagari 1997: 176 を一部改変、ツングース諸語は下線表示)



¹ 本稿は、International Workshop: Descriptive and Contrastive Analysis on Languages of Northeast Eurasia 2 (新潟大学、2018.11.23) で発表した“Similarities between Tungusic and Kolyma Yukaghir”と日本北方言語学会第 2 回大会 (富山大学、2019.11.08) で発表した「ツングース諸語とユカギール語の文法的類似性について」に基づき、修正・加筆を行ったものである。なお、本研究は科学研究助成 (研究活動スタート支援 19K23066, 研究課題名: 「ツングース語族における地域的分布と類型論的相違の相関性について」) を受けたものである。また、本稿における例文の表記、グロス、和訳は、筆者によるもので、原典と異なることがある。

² ホジェン語の分類に関しては風間 (1996) に従う。

しかし、ツングース諸語と周辺の大言語であるロシア語や中国語との接触に関する先行研究（津曲 1996, Tsumagari 1997）と比べ、ツングース諸語と東シベリアに分布するユカギール語の言語接触については、関連研究が非常に限られている。そのため、本稿はツングース諸語とユカギール語の南方言であるコリマ・ユカギール語の文法的類似性について考察し、周辺言語同士である北ツングース諸語とコリマ・ユカギール語の間に著しい文法的共通性が見られることを明らかにする。

1. ツングース諸語とユカギール語の類型論的特徴と両言語の言語接触に関する先行研究

1.1. ツングース諸語とユカギール語の類型論的特徴

ツングース諸語とユカギール語は、接尾辞中心の膠着型、主格・対格型、SOV 語順、格標示型、後置詞型の類型論的特徴において、共通している。しかし、ユカギール語に見られる自動詞と他動詞の区別が文法的に重要であること、焦点を示す特別な手段を持つこと、多様な分詞形が存在すること等は、ツングース諸語と大きく異なっている。

1.2. ツングース諸語とユカギール語の言語接触に関する先行研究

コリマ・ユカギール語の記述文法である Maslova (2003:23) と Nagasaki (2011:215) によると、ユカギール語の分布地域はロシア語、サハ語、エウエン語（後述の「北ツングース諸語」に属する）とともに多言語社会をなしているという言及があり、言語接触の可能性が伺える。近年、Piispanen (2018, 2019ab) が、チュルク諸語とツングース諸語からユカギール語への借用について次々と研究成果を発表しているが、主に借用語中心の語彙研究にとどまっている。そのため、ツングース諸語とユカギール語の間における文法現象を扱った言語接触の研究は、管見の限り、あまり見られない。

2. ツングース諸語とコリマ・ユカギール語における文法的類似性

第2節では、2.1. 定動詞（直説法）の時制体系、2.2. 定動詞（直説法）3 人称表示における数の対立、2.3. アスペクト表示の形態/統語法、2.4. 特定格と否定形の共起による分析的欠如表現、2.5. 指示転換の観点から見た条件形、2.6. 関連構文の6つの文法事項において、ツングース諸語とコリマ・ユカギール語の間に見られる文法的類似性について検討する。本稿におけるツングース諸語の当該文法特徴に対する判断は、上記の2.4.を除き、筆者の先行研究（白 2012, 2015, 2016, 2018, Baek 2019）にもとづく。一方、コリマ・ユカギール語に関しては、Maslova (2003) と Nagasaki (2011) を参照する。

本稿において、ツングース諸語はその地域的分布により、北ツングース諸語（東シベリア：エウエンキー語、エウエン語）、東ツングース諸語（沿海州・サハリン島：ネギダル語、ウルチャ語、ナーナイ語、オロチ語、ウイльта語、ウデヘ語）、南ツングース諸語（中国東北地方：ソロン語、ホジェン語、満洲語）の3つのグループ（各言語の分布地域に関しては図2参照）に分けて検討する。今日のユカギール語は、ツンドラ・ユカギール語（北方言）とコリマ・ユカギール語（南方言）の2つの方言に大別されるが、本稿ではツングース諸語と隣接しているコリマ・ユカギール語に注目する。

2.1. 定動詞（直説法）の時制体系

白（2016）では、表 1-1 のようにツングース諸語の定動詞（直説法）時制体系をその地域的分布に基づき、3 つのパターン（北ツングース諸語（非未来／未来）、東ツングース諸語³（過去／現在／未来）、南ツングース諸語（非過去／過去））に分類できることを指摘した。これに基づくと、北ツングース諸語（用例 1-1~1-3, 表 1-1）とコリマ・ユカギール語（用例 1-4~1-6, 表 1-2）は、同じく非未来と未来が対立する定動詞時制体系を有することが確認できる。

表 1-1. ツングース諸語の定動詞（直説法）における時制体系（白 2016: 56, 一部改正）

		現在	過去	未来
北	Ek (I)	-rA or -ø		-jA
	E (I)	-r(A)		-ji(r)
	N (I)	-ja or -ø		-
東	OI (III)	-rA or -ø	-	-(r)ilA
	Nn (III)	-rA or -ø	-kA	-jaa(n)+(ra)
	Oc (II)		-	
	Ut (III)	-rA	-tA	-rilA
	U (II)	-dA or -ø	-kA	-jA
	S (I)	-rA or -ø	-	-rA or -ø
南	Hz (II)	-rA or -ø	-	-rA or -ø
	M (IV)	-mbi	-hAbi	-mbi

Evenki

・ 現在

- 1-1) nuŋan əkun-ma sã-rə-n.
 3SG.NOM something-ACC know-N.FUT-3SG
 「彼は何かを知っている。」

(Nedjalkov 1997: 99)

・ 過去

- 1-2) ikəə-ǰəə-rī asātkān ī-rə-n.
 sing-IMP-PTCP.PRS girl enter-N.FUT-3SG
 「歌っている少女が入った。」

(Bulatova and Grenoble 1999: 40)

³ もっとも北部に分布する東ツングース諸語であるネギダル語は、北ツングース諸語と同じく、同一形式で現在と過去を表し得る非未来時制形が存在する。

・ 未来

1-3) *bi* *sinə* *ŋənə-b-jə-m.*
 1SG.NOM 2SG.ACC go-CAUS-FUT-1SG
 「私はあなたを行かせるだろう。」

(Nedjalkov 1997: 244)

表 1-2. コリマ・ユカギール語の定動詞（直説法）における時制体系（他動詞の場合、Nagasaki 2011: 229）

	非未来	未来
1SG	- $\emptyset$	- <i>t</i> - $\emptyset$
1PL	- <i>t'</i> - <i>j</i> - <i>i</i>	- <i>te</i> - <i>j</i> - <i>t</i> - <i>i</i>
2SG	- <i>mek</i> -/ <i>mik</i>	- <i>te</i> - <i>mek</i> - <i>t</i> - <i>mek</i> -/ <i>te</i> - <i>mik</i> - <i>t</i> - <i>mik</i>
2PL	- <i>met</i>	- <i>te</i> - <i>met</i> - <i>t</i> - <i>met</i>
3SG	- <i>m</i>	- <i>te</i> - <i>m</i> - <i>t</i> - <i>u</i> - <i>m</i>
3PL	- <i>ŋaa</i> -/ <i>ŋam</i>	- <i>ŋi</i> - <i>te</i> - <i>m</i>

Kolyma Yukaghir

・ 現在

1-4) *tudel* *t'āj-e* *ōjə-m.*
 3SG.NOM tea-INS drink-TR.N.FUT.3SG
 「彼はお茶を飲む。」

(Nagasaki 2011: 238)

・ 過去

1-5) *ayd'e-de-jle* *jodo-m.*
 eye-POSS.3-ACC wrap-TR.N.FUT.3SG
 「彼は彼女の眼を包んだ。」

(Nagasaki 2011: 238)

・ 未来

1-6) *met* *tet-ul* *qamie-t.*
 1SG.NOM 2SG.ACC help-TR.FUT.1SG
 「私はあなたを助けるだろう。」

(Nagasaki 2011: 238)

2.2. 定動詞（直説法）3 人称表示における数の対立

白（2016）では、定動詞（直説法）の3 人称動詞述語構造に表示される数の対立に焦点を当て、表 2-1 のとおり、ツングース諸語の地域的分布に基づいて4 つのタイプ（北ツングース諸語：義務的対立型、東ツングース諸語⁴：任意的対立型、南ツングース諸語1：非対立型、

⁴ ネギダル語は、北ツングース諸語と同様に、義務的対立型として分類される。

南ツングース諸語 2：人称非表示型）に区分できると論じた。北ツングース諸語（2-1, 2-2, 表 2-1）とコリマ・ユカギール語（2-3, 2-4, 表 2-2）は、両方とも常に 3 人称単複が区別される義務的弁別型として見なされる。

表 2-1. ツングース諸語の定動詞（直説法）における 3 人称表示（白 2016: 62）

		3 単数	3 複数	数対立
北	Ek (I)	- <i>n</i>	- $\emptyset$	義務的対立型
	E (I)	- <i>n</i>	(- <i>r</i>)	義務的対立型
	N (I)	- <i>n</i>	- $\emptyset$	義務的対立型
	Ol (III)	- $\emptyset$	(- <i>l</i>)	任意的対立型
東	Nn (III)	- $\emptyset$	(- <i>l</i>)	任意的対立型
	Ut (III)	- $\emptyset$	(- <i>l</i>)	任意的対立型
	U (II)	- $\emptyset$	(- <i>du</i>)	任意的対立型
	S (I)	- <i>n</i>	- <i>n</i>	非対立型
南	Hz (II)	(- <i>n</i>)	(- <i>n</i>)	非対立型
	M (IV)	-	-	人称非表示型

Evenki

・ 3 人称単数

2-1) *girki-w mindu oro-r-wi buu-rə-n.*
 friend-1SG 1SG.DAT reindeer-PL-REF.SG give-N.FUT-3SG
 「私の友だちは私に自分のトナカイをくれた。」

(Nedjalkov 1997: 249)

・ 3 人称複数

2-2) *asa-l əmə-rə-ə.*
 woman-PL come-N.FUT-3PL
 「女性たちが来た。」

(Nedjalkov 1997: 248)

表 2-2. コリマ・ユカギール語の定動詞（直説法）における 3 人称表示（*juə*- ‘見る’、*šohie*- ‘消える’、Maslova 2003: 140）

	他動詞		自動詞	
	非未来	未来	非未来	未来
3 単数	<i>juə-m</i>	<i>juə-tem</i>	<i>šohie-j</i>	<i>šohie-tej</i>
3 複数	<i>juə-gaa</i>	<i>juə-yitem</i>	<i>šohie-jəji</i>	<i>šohie-yitej</i>

Kolyma Yukaghir

・3 人称単数

- 2-3) *tudel* *t'āj-e* *ōje-m.*
3SG.NOM tea-INS drink-TR.N.FUT.3SG
「彼はお茶を飲む。」

(Nagasaki 2011: 238)

・3 人称複数

- 2-4) *tude-gele* *nume-get* *nie-ŋaa.*
3SG-ACC house-ABL call-TR.PL.N.FUT.3
「彼らは彼を家から呼んだ。」

(Nagasaki 2011: 238)

2.3. アスペクト表示の形態/統語法

ツングース諸語における開始相、進行相、結果相を表示する形態/統語法は、表3のとおり、その地域的分布によって異なるパターン（北ツングース諸語：総合的 *synthetic*、東ツングース諸語：総合的 *synthetic*/分析的 *analytic*、南ツングース諸語：分析的 *analytic*）が確認できる。北ツングース諸語とコリマ・ユカギール語は、動詞形式に直接開始（3-1, 3-4）、進行（3-2, 3-5）、結果（3-3, 3-6）を表すアスペクト形式を付加させる総合的戦略（*synthetic strategy*）で該当するアスペクト効果をもたらす点において、類似性が見られる。

Evenki

・開始相: -l

- 3-1) *kuŋakān* *soot* *soŋo-l-lo-n.*
child very cry-INC-N.FUT-3SG
「子供はひどく泣き始めた。」

(Bulatova and Grenoble 1999: 31)

・進行相: -jA

- 3-2) *bajə* *agi-tki* *girku-ja-ja-n.*
man forest-DIR go-IMPF-FUT-3SG
「人が森のほうへ行っている。」

(Nedjalkov 1997: 247)

・結果相: -t

- 3-3) *asatkan* *ju-du* *tagə-t-čə-rə-n.*
girl house-DAT sit.down-RES-IMPF-N.FUT-3SG
「女の子は家で座っている。」

(Nedjalkov 1997: 248)

Kolyma Yukaghir

・開始相: *-ā*

- 3-4) *tāt lebejdī-k šaqal'e-š-ā-l*.
that berries-PRED gather-CAUS-INC-OF.PTCP.1PL
「私たちはそのベリーを集め始めた。」

(Maslova 2003: 201)

・進行相: *-nu*

- 3-5) *tamun-gele el+med-ōl'*
that-ACC NEG+listen-DESD (NEG:3SG)
ibil'ie-nu-j orn'ie-nu-j.
cry-IMPF-INTR.N.FUT.3SG shout-IMPF-INTR.N.FUT.3SG
「彼はそれを聞かず、泣いたり、叫んだりしている。」

(Maslova 2003: 183)

・結果相: *-ō*

- 3-6) *amd-ō-t qodō-j*.
die-RES-IMPF.CVB.SS lie-INTR.N.FUT.3SG
「彼は、死んだまま横たわっている。」

(Maslova 2003: 206)

表 3. ツングース諸語の地域的分布による開始相、進行相、結果相の形態/統語表示(開始相は白 2018: 61, 進行相と結果相は Baek 2019: 59 参照)

	開始相	進行相	結果相
北	Ek (I)	<i>-l</i>	<i>-jA~~čA</i>
	E (I)	<i>-l</i>	<i>-d/-j~~jɪd/-čɪd</i>
東	N (I)	<i>-l</i>	<i>-jA (?)</i>
	Oi (III)	<i>-lU</i> CVB ₁ +AUX	CVB ₁ + EXIST
	Nn (III)	<i>-lO</i> CVB ₁ +AUX	CVB ₁ + EXIST
	Oc (II)	<i>-li</i> CVB ₁ +AUX	CVB ₁ + EXIST
	U (II)	<i>-li</i> CVB ₁ +AUX	CVB ₁ + EXIST
	Ut (III)	<i>-lu</i> CVB ₁ +AUX	CVB ₁ + EXIST
南	S (I)	CVB ₁ +AUX	<i>-jɪ</i> CVB ₁ + EXIST
	Hz (II)	CVB ₁ +AUX	CVB ₁ + EXIST
	M (IV)	CVB ₁ +AUX	CVB ₁ + EXIST

2.4. 特定格と否定形の共起による分析的欠如表現

表4は、特定格と否定形がともに現れ、欠如を示す分析的な統語現象（日本語訳「～なしの××」）が見られるツングース諸語を整理したものである。同統語構造においても、北ツングース諸語（一部の東ツングース諸語と南ツングース諸語含む）とコリマ・ユカギール語⁵は、用例4-1.4-2のように、類似性が確認できる。

表 4. ツングース語の地域的分布による分析的欠如表現の有無

		分析的欠如表現
北	Ek (I)	+
	E (I)	+
東	N (I)	+
	Ol (III)	-
	Nn (III)	-
	Ut (III)	+
	U (II)	+
南	S (I)	+
	Hz (II)	-
	M (IV)	-

Evenki

4-1) *d'al-ja* *āčin* *bəjə*.
 intellect-ABES(< INDEF.ACC) NEG man
 「知性ない人」

(Nedjalkov 1997:159)

Kolyma Yukaghir

4-2) *tāj* *el+sāqar-t'uon* *ōje*.
 tea NEG=sugar-ABES drink.TR.N.FUT.1SG
 「私は砂糖なしのお茶を飲む。」

(Nagasaki 2011: 248)

2.5. 指示転換の観点から見た条件形

表5のとおりに、ツングース諸語の条件文を構成する条件形はその地域的分布により、4つのタイプが見られる（北ツングース諸語：指示転換支配型の単一条件形**mi* (SS) ⇔ **rAki* (DS)、東ツングース諸語 1⁶（異主語条件副動詞**rAki*-保持）：指示転換支配型の複数条件形

⁵ 但し、ツングース諸語とコリマ・ユカギール語は、分析的欠如表現に用いられる否定形式に差異が見られる(ツングース諸語: 存在否定、コリマ・ユカギール語: 一般否定)。また、特定格と否定形式の語順においても異なる。

⁶ ネギダル語は、北ツングース諸語と同じく、単一条件副動詞 **-mi* と **-rAki* がそれぞれ指示転換によって厳密に使い分けられる。

表5. 指示転換の観点から見たツングース語の地域的分布による条件形式（異主語条件副動詞*-*rAki*-と対応する形式はボールド表示、白 2015: 147一部改訂）

		現実条件			非現実条件		
		同主語	同・異主語	異主語	同主語	同・異主語	異主語
北	Ek (I)	<i>-mi</i>		<i>-rAki-PERS</i>	<i>-mi</i>		<i>-rAki-PERS</i>
	E (I)	<i>-mi</i>		<i>-rAk-PERS</i>	<i>-mi</i>		<i>-rAk-PERS</i>
	N (I)	<i>-mi</i>		<i>-jik-PERS</i>	<i>-mi</i>		<i>-jik-PERS</i>
	Ol (III)	<i>-mi</i> , <i>-pi</i>	<i>osim</i>	$\emptyset$ <i>-wočA-PERS</i>	<i>bimčə(n)</i>		
	Nn (III)	<i>-mi</i> , <i>-pi</i>	<i>osim</i>	$\emptyset$ <i>-OčiA-PERS</i>	<i>osim</i> , <i>bimčəni</i>		
東	Oc (II)	<i>-mi</i> <i>-wi</i>		<i>-(A)ki-PERS</i> <i>-(i)čAA-PERS</i>	<i>-mi</i>		<i>-(A)ki-PERS</i>
	Ut (III)	<i>-mi</i> , <i>-pee</i>		<i>-rai-PERS</i> <i>-(k)uta-PERS</i>	<i>-mi?</i> <i>-pee</i>		<i>-rai-PERS</i> <i>-kuta-PERS</i>
	U (II)	<i>-mi</i> <i>-li</i>	<i>bisi</i>	$\emptyset$ <i>-(l)isi-PERS</i>	<i>bisi</i>		
	S (I)			<i>-kki-PERS</i>	<i>-kki-PERS</i>		
南	Hz (II)			<i>-ki-PERS</i>	<i>-ki-PERS</i>		
	M (IV)			<i>-či</i>	<i>-či</i>		

*-*mi* (SS) $\Leftrightarrow$ *-*rAki*- (DS)/*-*pi* (SS) $\Leftrightarrow$ *-*bučA*- (DS), 東ツングース諸語 2（異主語条件副動詞*-*rAki*-消失）：指示転換支配型の複数条件形*-*mi* (SS) $\Leftrightarrow$ $\emptyset$ /*-*pi* (SS) $\Leftrightarrow$ *-*bučA*- (DS)/指示転換非支配型の条件小詞、南ツングース諸語：指示転換非支配型の単一条件形*-*rAki*- (VS))。北ツングース諸語（一部の東ツングース諸語含む）とコリマ・ユカギール語は、両言語とも条件文の従属節と主節における主語が一致するか否かにより、それぞれ異なる条件副動詞が用いられる点において一致している。これに関しては、用例 5-1~5-4（エウェンキー語）と用例 5-5~5-8（コリマ・ユカギール語）参照。

Evenki（現実条件）

・同主語条件: *-mi*（同主語条件副動詞）

5-1) <i>aja-t</i>	<i>hawa-l-mi-l</i> ,
good-INS	work-INC-COND.CVB.SS-PL
<i>bəjə-l</i>	<i>oo-jaŋā-sun</i> .
person-PL	become-PTCP.FUT-2PL

「あなたたちが良く働くなら、人間になるだろう。」

(Bulatova and Grenoble 1999: 44)

・異主語条件: *-rAki-* (異主語条件副動詞)

- 5-2) *si dolbotono mundulə əmə-rəki-s,*
2SG.NOM evening 1PL.EXC.LOC come-COND.CVB.DS-2SG
bi girki-wi əri-ǰəŋə-w.
1SG.NOM friend-REF.SG call-PTCP.FUT-1SG

「夕方、あなたが私たちのところに来るなら、私は自分の友達を呼ぶだろう。」

(Nedjalkov 1997: 54)

Evenki (非現実条件)

・同主語条件: *-mi* (同主語条件副動詞)

- 5-3) *asatkan-mə qjaw-mi, asila-mčə-w.*
girl-ACC love-COND.CVB.SS marry-SUBJ-1SG

「私があの女の子を愛するなら、彼女と結婚するのに」

(Nedjalkov 1997: 54)

・異主語条件: *-rAki-* (異主語条件副動詞)

- 5-4) *nuŋan dukuwu-r-wa mindu buu-rəki-n,*
3SG.NOM book-PL-ACC 1SG.DAT give-COND.CVB.DS-3SG
bi əsi taŋi-mčə-w.
1SG.NOM now read-SUBJ-1SG

「彼がその本を私にくれたなら、私は今読むのに」

(Nedjalkov 1997: 55)

Kolyma Yukaghir (現実条件)

・同主語条件: *-ŋide* (同主語条件副動詞)

- 5-6) *el+jubege-ŋide tet-ek lek-te-me.*
NEG+stuff.oneself-COND.CVB.SS 2SG-PRED eat-FUT-OF.1SG

「おなかがいっぱいじゃなかったら、あなたを食べるだろう。」

(Maslova 2003: 164)

・異主語条件: *-gene* (異主語条件副動詞)

- 5-7) *epie arqa l'e-l-u-gene,*
grandmother near be-1-E-COND.CVB.DS
met-kele nilgi el+peššej-t.
I-ACC nobody NEG+throw-FUT(NEG:3SG)

「私が祖母の近くにいるなら、誰も私を放っておかないだろう。」

(Maslova 2003: 393)

Kolyma Yukaghir (非現実条件)

・同主語条件: *-ŋide* (同主語条件副動詞)

- 5-8) *juə-l'el-ŋide, m-et+qī-nu-l'el-ŋa.*
see-INFR-COND.CVB.SS AFF-IRLIS-shoot-IMP-TR.N.FUT.3PL

「彼らが（これを）見たら、撃たなかったのに。」

(Maslova 2003: 171)

・異主語条件: *-gene* (異主語条件副動詞)

5-9) *abute-č-ā-l'el-gene*, *m-et+jerqoge-jek*.

pour-ITER-INC-INFR-COND.DS *AFF-IRLIS-move-INTR.2SG*

「私がぶちまけだしたら、あなたは動くのに。」

(Maslova 2003: 397)

2. 6. 相関構文

白 (2012) では、表 6 のとおり、従属節の疑問詞 WH と主節の疑問詞 WH または指示詞 DEM が相応する相関構文においても、地域的分布によって異なる統語特徴が見られることを指摘した (北ツングース諸語: WH-DEM, 従属節の動詞は終止形、東ツングース諸語: WH-DEM/WH-WH, 従属節の動詞は終止形/非終止形、南ツングース諸語: WH-DEM, 従属節の動詞は非終止形)。ここにおいても、北ツングース諸語とコリマ・ユカギール語は、用例 6-1~6-4 のように、常に従属節の疑問詞と主節の指示詞が対応し、従属節の動詞述語構造には終止形のみが用いられるという同じ統語特徴が観察される。

表 6. ツングース語の地域的分布による相関構文の統語特徴 (白 2012: 169, 174 に基づいて筆者一部改定 (ネギダル語))

		相関形式		従属節の動詞形式	
		WH-WH	WH-DEM	非終止	終止
北	Ek (I)	-	+	-	+
	E (I)	-	+	-	+
	N (I)	+	+	+	+
東	Ol (III)	+	+	+	+
	Nn (III)	+	+	+	+
	Oc (II)	+	+	+	+
	Ut (III)	-	+	+	+
	U (II)	+	+	+	+
	S (I)	+	-	+	-
南	Hx (II)	+	-	+	-
	M (IV)	+	-	+	-

Evenki

・ WH-DEM (従属節動詞は終止形)

6-1) *ŋi tumi-čē-n mawut-u-t mo-wa, tar dawdu-wki.*
 who hit-IMPV-PRS.3SG lasso-E-INS tree-ACC that win-PTCP.HAB

「投げ縄で木に命中する人は勝つ。」

(池上 2002: 352)

6-2) *ŋi* *alba-wki* *tumi-je-mi* *tujəwun-mə*,
 who be.unable-PTCP.HAB hit-IMPF-COND.CVB pole-ACC
tara *xalja-wkan-i-wki-l*.
 that.ACC embarrass-CAUS-E-PTCP.HAB-PL
 「棒に命中することができない人を恥ずかしがらせる。」

(池上 2002: 352)

Kolyma Yukaghir

・WH-DEM (従属節動詞は終止形)

6-3) *mit* *qodo* *modo-jil'i*, *taat* *modo-ŋi* *tittel*.
 1PL.NOM how sit-INTR.1PL that live-INTR.N.FUT.3PL 3PL.NOM
 「彼らは私たちが暮らしているように暮らす。」

(Maslova 2003: 509)

6-4) *kin-tek* *num-met*, *tamun-pe-ŋin* *čumu* *mon-ŋi-k*.
 who-PRED meet-OF.2PL that-PL-DAT all say-PL-IMP.2
 「あなたたちが会う人たちにはすべてを言いなさい。」

(Maslova 2003: 511)

3. おわりに

表 7. 北ツングース諸語とコリマ・ユカギール語の文法的類似性

	北ツングース諸語	コリマ・ユカギール語	サハ語	ロシア語
非未来/未来の対立 (定動詞直説法)	+	+	–	–
3 人称単複の義務的対立 (定動詞直説法)	+	+	+	+
総合的アスペクト表示 (開始、進行、結果)	+	+	–	–
指示転換支配型の条件形	+	+	–	–
特定格と否定形による分析的欠如表現	+	+	+	–
WH-DEM 相関構文 (従属節の動詞は終止形)	+	+	+	+

本稿は、上記の 6 つの類型論的パラメータを用い、ツングース諸語とコリマ・ユカギール語における文法的類似性について考察を行った。その結果、地理的に近い位置に分布する北

ツングース諸語⁷とコリマ・ユカギール語は、表 7 の文法事項において、共通していることが確認できた。他の隣接言語であるサハ語（チュルク諸語）⁸とロシア語に比べても、その類似性は明確である。しかし、これらの文法的類似性が、どちらかの言語からの影響による結果であるかは確かではない。また、ユカギール語の北方方言であるツンドラ・ユカギール語に関しても検討が必要であろう。いずれにしても、両言語間の接触の可能性に関する研究は、ツングース祖語の類型論の特徴や変遷プロセスを明らかにするためにも、非常に重要な意義がある。

略号一覧

1, 2, 3: 1st person, 2nd person, 3rd person, ABES: abessive, ABL: ablative, ACC: accusative, AFF: affirmative, AUX: auxiliary verb, CAUS: causative, COND.CVB: conditional converb, CVB: converb, DAT: dative, DEM: demonstrative pronoun, DESD: desiderative, DIR: directive, DS: different-subject, E: epenthesis vowel, EXC: exclusive, EXIST: existential verb, FUT: future, HAB: habitual, IMP: imperative, IMPF: imperfective, INC: inchoative, INDEF.ACC: indefinite accusative, INFR: inferential, INS: instrumental, INTR: intransitive, IRLIS: irrealis, LOC: locative, ITER: iterative, NEG: negative, NOM: nominative, N.FUT: non future, OF: object-focus, PERS: personal ending, PL: plural, POSS: possessive, PRED: predicative, PRS: present, PTCP: participle, REF: reflexive, RES: resultative, SF: S-Focus, SG: singular, SS: same-subject, SUBJ: subjunctive, TR: transitive, VS: variable-subject, WH: wh-pronoun, -: 接辞境界, =: 接語境界

参考文献

- 白 尚燁. 2012. 「ツングース諸語の WH 関連構文の分布に対する類型的考察」『北方言語研究』2: 163-181.
- 白 尚燁. 2015. 「ツングース諸語における条件文の相違について」『北方言語研究』5: 129-152.
- 白 尚燁. 2016. 「地域類型論の観点から見たツングース諸語の定動詞における三人称標示」『北方言語研究』6: 53-71.
- 白 尚燁. 2018. 「地域類型論の観点から見たツングース諸語の補助動詞」『北方言語研究』8: 59-79.
- Baek, S. 2019. “Continuous aspects in Tungusic from the perspective of areal linguistics: progressive vs. resultative”. *Asian and African Languages and Linguistics* 13: 47-65.
- Bulatova, Nadezhda and L. Grenoble. 1999. *Evenki*. München / Newcastle: Lincom Europa.
- Ebata, Fuyuki. 2017. “The linguistic status of Sakha (Yakut): A contrastive analysis with Turkic and Tungusic languages”. Fuyuki Ebata and T. Kurebito (eds.). *Linguistic Typology of the North* 4: 53-66.
- Ikegami, Jiro. 1974. Versuch einer Klassifikation der tungusischen Sprache. Sprache, Geschichte und

⁷ 但し、ネギダル語に関しては、北ツングース諸語と共通しているところが多く見られるが、同時に東ツングース諸語との類似性も存在する。ネギダル語に見られる北ツングース諸語と東ツングース諸語の中間的特徴は、東ツングース諸語のうち、最も北部に位置している地域の特徴を反映していると考えられる。

⁸ Ebata (2017)は、サハ語における義務的な3人称表示の数対立と分析的欠如表現について論じ、同現象は他の同系のチュルク諸語と異なり、北ツングース諸語に類似していることを指摘した。

- Kultur der Altaischen Völker, Protokollband der XII. *Tagung der Permanent international Altaische Conference 1969 in Berlin*: 271-272. Berlin Akademie Verlag.
- 池上二良. 2002. 『ツングース・満洲諸語資料訳解』札幌: 北海道大学図書刊行会.
- 風間伸次郎. 1996. 「ヘジェン語の系統的位位置について」『言語研究』109: 117-139.
- Maslova, Elena. 2003. *A Grammar of Kolyma Yukaghir*. Berlin /New York: Mouton de Gruyter.
- Nagasaki, Iku. 2011. “Kolyma Yukaghir”. Yasuhiro Yamakoshi (ed.). *Grammatical Sketches from the Field*: 213-256. Tokyo: Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa Tokyo University of Foreign Studies.
- Nedjalkov, Igor V. 1997. *Evenki*. London: Routledge.
- Piispanen, Peter Sauli. 2018. “Additional Turkic and Tungusic borrowings into Yukaghir,” *Turkic Languages* 22: 108-138.
- Piispanen, Peter Sauli. 2019a. “Additional Turkic and Tungusic borrowings into Yukaghir II,” *Journal of Old Turkic Studies* 3(1): 54-82.
- Piispanen, Peter Sauli. 2019b. “Additional Turkic and Tungusic borrowings into Yukaghir III,” *Journal of Old Turkic Studies* 3(2): 321-371.
- 津曲敏郎. 1996 「中国・ロシアのツングース諸語」『言語研究』110: 177-191
- Tsumagari, Toshiro. 1997. “Linguistic diversity and national borders of Tungusic.” H. Shoji & J. Janhunen eds. *Northern minority languages: problems of survival* (Senri Ethnological Studies no.44). Suita: National Museum of Ethnology: 175-186.

Grammatical Similarities between North Tungusic and Kolyma Yukaghir

Sangyub BAEK
(Muroran Institute of Technology)

Tungusic is a language family widely distributed across the Russian and Chinese territories. Due to its geographical distribution, Tungusic is known to have been or be in contact with a variety of neighboring languages such as Turkic, Yukaghir, Russian, Mongolic, Chinese, Nivkh, and Ainu. However, little research has been made on a possible language contact between Tungusic and Yukaghir.

The main objective of this paper, therefore, is to focus on grammatical similarities between North Tungusic and Kolyma Yukaghir. This study mainly concentrates on 6 grammatical issues as follows: (1) tense system in finite indicative verbs, (2) number distinction in the third person on the finite indicative verbs, (3) morphological/syntactic strategy of marking inchoative, progressive, and resultative aspects, (4) abessive expression with an analytic combination of a specific case and negative element, (5) switch-reference in conditional forms, and (6) correlative.

In conclusion, this study shows that Kolyma Yukaghir shares similar grammatical characteristics to geographically closely situated North Tungusic languages in the following points:

- (1) Non-future vs future tense opposition in finite indicative verbs
- (2) Obligatory distinction between the third person singular and plural
- (3) Synthetic strategy of marking inchoative, progressive, and resultative aspects
- (4) Abessive expression with an analytic combination of a specific case and negative element
- (5) Strict contrast of switch-reference in the use of conditional forms
- (6) WH-DEM correlative and final verb form in wh-clause

(ベック・サンヤップ iyairaykere@hotmail.co.jp)